
特集 つくられる地域, こわされる地域

ベトナムと東南アジア

Vietnam and Southeast Asia

古田 元夫*

FURUTA Motoo

キーワード：中華思想，東南アジア，冷戦，地域国家，普遍国家

KEY WORDS: Chinese ideology, Southeast Asia, Cold war, Regional country, universal country

For Vietnamese people, the matter from when they consider themselves as a member of Southeast Asia is a historical question not so easy to have an immediate answer. Vietnam in pre-modern time had been a member of the East Asian world, i. e. the Chinese civilization world, rather than one Southeast Asia. The “Chinese ideology” of Vietnamese pattern had made contribution to the strengthening of the sense of national independence, but had obstructed Vietnam to identify herself her position in Southeast Asia. In the detachment of Vietnam from the traditional Chinese civilization world, the role of French colonialist was of great significance. But the fact that Vietnam could set herself in the Southeast Asian framework was the great endeavor of the Vietnamese themselves in modern and contemporary times. The role of the Communists was of great significance in the overcoming of the narrow-minded nationalism. It is thus by no means accidental that the Democratic Republic of Vietnam right at the outset of this existence in the late 1940s has taken account of the alliance with other countries in Southeast Asia. The independent Vietnam right from the outset was a “regional country” of Southeast Asia. But the extending of the cold war into Asia compelled Vietnam to change her orientation. From 1950, the Vietnamese communists began to assert Vietnam as a country standing in the socialist camp, thus Vietnam was no longer a “regional country,” but turning into a “universal country” representing the universal civilization which was the socialism of a common pattern for all socialist countries. Owing to two great events in the late 1980s that Vietnam could come back to her way in the pre-cold war period, that is the one for locating herself as a “regional country” in Southeast Asia. The two are: Vietnam set out to carry on the Doi Moi, and the cold war structure was globally broken up.

* 東京大学大学院総合文化研究科教授 Professor, The University of Tokyo

はじめに

ベトナムは1995年、ASEANに加盟した。今日では、「ベトナムは東南アジアの一員である」という命題は、ベトナム自身の自己主張でもあり、他の東南アジア諸国を含めて、広く国際社会に受け入れられた認識だといってよいだろう。ではベトナムは、いつからどのような理由で自らを東南アジアという地域世界の中に定位するようになったのであろうか。この小論では、まずこの問題に関して、私が描いてきた俯瞰図を紹介し、次にそれに対する現在のベトナムの研究者の反応を紹介して、問題となる点を整理してみたい。この俯瞰図は、1995年刊行の拙著『ベトナムの世界史』[古田 1995]で基本的な骨格を提示したもののだが、その後98年にはこの本のベトナム語訳がベトナムで出版された[Furuta 1998]。さらに、私は、ほぼ本稿に提示した俯瞰図と同一の内容の報告[Furuta 2000]を、2000年9月にハノイで行われたベトナム社会人文科学国家センターとハノイ国家大学共催の国際シンポジウム「20世紀のベトナム」で行っている。

I. 歴史的俯瞰

- ①10世紀に中国からの自立を達成して以降、19世紀にフランスによって植民地支配下に入れられるまで、基本的にはベトナムは、自らを中華世界の一員と見なしてきた。中国を「北国」とし、これに対するベトナム＝「南国」の文明性と自立を主張するのが、前近代ベトナムの国家意識だった。ベトナムの、自らを中華と見なす文明性の主張は、ベトナムの自立に先立つ1000年にわたる中国支配の産物という、他から強いられた結果ではなく、ベトナムの自主的な選択だった。そのような道をベトナムが選択したのは、中国の圧力に対抗するためであり、いわば「脱中国のための中国化」[桃木 1996: 67-73] ないし「中国化されないための中華化」だった。このベトナム版中華意識は、ベトナムの中国に対する国家意識の強化にはつながったが、周辺の中華文明を共有していない人々、国々とベトナムの相違を強調する側面があった。そのため、ベトナムは「南進」によって周辺の東南アジア世界との関係を客観的には増したにもかかわらず、東南アジア世界の中に自らを定位するような意識を形成しえなかった。
- ②ベトナムを中華世界から切り離す上で大きな役割を果たしたのは、フランスの植民地支配だった。フランス支配は、i) ベトナムに対する中国王朝の宗主権を否定した、ii) ベトナムを、「インド化」した東南アジアの成員であったカンボジア、ラオスとともに、インドシナという枠組みで支配した、iii) 科挙制度を廃止し、ベトナム語のローマ字表記を普及させることにより、ベトナム知識人を漢字文明から切り離した、という三つの側面で、ベトナムを中華世界から引き離したのである。
- ③しかしながら、フランスがなしたことは、ベトナムを中華世界から切断する契機を形成したにすぎず、この流れを促進し、ベトナムを積極的に東南アジアに定位していたのは、ベトナム人の主体的な選択であり、ベトナムの近代ナショナリズムの発展

そのものだった。前近代の南国意識は近代ナショナリズムの形成の土台として貴重な遺産ではあったが、そのままでは、フランス植民地支配という近代的な帝国主義の支配への対抗原理にはなりえなかった。第一に、帝国主義による世界分割の一環となされたフランスのインドシナ統治に対抗するためには、中華世界の一員としてのベトナムという世界観を脱して、広く地球大の広がりをもつ世界の中でベトナムを位置づけることが求められるようになった。第二に、インドシナという枠組みで植民地支配が形成されたことは、それからの脱却のためには、カンボジア人やラオス人をはじめとする周辺の異質な文化をもつ人々との結合の論理を形成することを、不可欠の課題とした。第三に、伝統的な南国意識は、基本的には王のもとでの臣下としての人々の一体性という王朝体制の国家意識であり、阮朝がフランス支配の支柱になって以降は抵抗の原理にはなりえず、これにかわって同胞としての人々の一体感、つまりは民族ないしは国民としてのベトナム人の結合が、模索されることになった。第一の課題が、脱中華世界という志向性をもつこと、第二の課題が、ベトナム版中華意識を克服して、周辺の東南アジア世界との関係を自覚する性格をもっていることは、容易に理解できる。第三の点は一見、東南アジアとは無関係に見えるが、20世紀初頭のベトナム知識人が、一般民衆を含めた国民共同体の創出のためには民衆への識字教育が不可欠であるという認識に到達した時に、ベトナム語の表記法として最も望ましいと見なされたのが、ローマ字表記法だった。それまで、フランス植民地支配の押し付けとして抵抗が強かったローマ字表記法を、「クォックグー（国語）」と呼び、それを豊かな表現力をもった言語として発展させたのはベトナム知識人であり、その結果、ベトナムの日常レベルの言語生活は漢字の知識を必須とはしない状況が生まれたのである。したがって、第三の課題も、ベトナムの脱中華世界、東南アジアへの定位と連関を有しているわけである。

- ④ベトナムのナショナリズムを担った様々な政治潮流の中で、上記の三つの課題に最も体系的な回答を出したのは、共産主義者だった。特に、東南アジアへの定位に直接関連する第二の課題への対応では、共産主義者の役割は顕著だった。共産主義者は、1930年自らの党をインドシナ共産党と称した。これは、当時のコミンテルン式の国際主義の機械的導入ではあったが、ベトナム史の文脈では、カンボジア人やラオス人との連携を明示的に自覚した最初の政治結社の誕生を意味していた。また、ベトナムというシンボルを、狭い意味のベトナム人（ベトナムの多数民族たるキン族）の独占物から、ベトナムに居住する少数民族にも共有されるものに転換したのも、共産主義者だった。1940年代前半のベトミン運動において、中越国境の少数民族地域が拠点となったこともあり、45年に独立を宣言したベトナム民主共和国は、自らを多民族国家と見なした。このベトナムの民族的な多様性の認識は、ベトナムが自らを東南アジアに定位する上では、重要な意義を担った。なぜならば、ベトナムには、キン族以外に、タイ系、モン・クメール系、マレー系、ビルマ系の少数民族が居住しており、これら

をベトナムの構成要素と見なすことは、ベトナムの東南アジア性を自覚することと同義だからである。

- ⑤このように考えれば、共産主義者を中心とした政権であるベトナム民主共和国が、その成立当初の1940年代の後半、東南アジア諸国との連携を重視する、いわば東南アジアの「地域国家」という性格を強く帯びていたことは偶然ではない。この時期、タイのバンコクとビルマのラングーンにはベトナム民主共和国の代表部が置かれ、外交活動の拠点になっていた。特にバンコクは、ベトナムがカンボジアやラオスの反仏勢力との提携を形成する上でも重要な意味をもっており、1947年9月には自由タイの政治家とベトナム人共産主義者の提携を基礎に「東南アジア連盟」(Southeast Asian League)という、東南アジアの名を冠した、独立運動の相互支援組織が結成されるなどした。初期のベトナム民主共和国が、東南アジア諸国との連携を重視したのは、当時は東南アジアが、第二次世界大戦後最も早く独立運動が活発に展開された地域であったためであり、国際共産主義運動の拠点とはベトナムが遠く離れていたためである。フランスの再侵略に直面していたベトナムにとっては、ベトナムの問題を基本的にはフランスの問題と見なしていたソ連よりは、ベトナムの抗戦に強い同情を寄せた自由タイ政府のほうが、はるかに信頼すべき相手だった。東南アジアという地域名称が普及するのは、第二次世界大戦中のことだが、ベトナムは戦後ただちに、この目新しい地域世界の中に自らを登録したわけである。
- ⑥ベトナムの東南アジアの「地域国家」としての発展を妨げたのは、国際政治における冷戦構造だった。中華人民共和国の成立後の1950年初頭、ベトナムは、自らの抗戦へのソ連・中国の支援を確保するかわりに、自らを「社会主義陣営の東南アジアにおける前哨」と位置づけ、帝国主義の影響下にある他の東南アジアと自らの区別を強調するようになった。ベトナムは、東南アジアの「地域国家」というよりは、社会主義という人類共通の普遍的理念を体現する「普遍国家」となった。ベトナムが、ベトナム戦争という冷戦時代最大の局地戦争の舞台になったことは、一面では、こうしたベトナムの「普遍国家」性を強化させることになった。
- ⑦しかし、ベトナムの近代ナショナリズムの必然的帰結ともいえる、東南アジアの「地域国家」としての定位という道は、冷戦によって完全に断ち切られることはなかった。ベトナム戦争末期に冷戦構造の弛緩とともに、ベトナムの東南アジア回帰がはじまる。この道は、1970年代後半以降のカンボジア問題で一時難航するが、80年代末に世界的な規模で冷戦体制が終焉すると、急速に卓越した動きとなり、95年のベトナムのASEAN加盟に結びついた。ドイモイ開始後も、ベトナムは「社会主義志向の堅持」を唱えているが、この社会主義は、かつてのような人類普遍のモデルに従ったものというよりは、ベトナムの個性と結合した「ベトナム的」なものとなされるようになっている。このような意味での社会主義は、東南アジアの「地域国家」としてのベトナムというあり方と矛盾するものではない。

II. 中華世界の中のベトナム

以上のような私の描いた俯瞰図に関しては、ベトナムの研究者と意見を交換する機会が何度かあった。私の俯瞰図でベトナムの人々から最も強い批判が出たのは、①の部分、つまりは前近代ベトナムを中華世界の一員と描く点だった。

これは、現在のベトナムのナショナル・ヒストリーが克服の対象としてきた歴史像が、ベトナムを「小中国」と見なす、つまりは前近代のベトナムは中国のミニチュアにすぎず、注目に値するような独自の文化などなかったと見なす史観であることを考えると、予想された反発ではある。私の本のベトナム語版の刊行を引き受けてくれたベトナムの出版社の編集者は、私の本の第一章の題が「中華世界の中のベトナム」だと、読者が反発して、後の部分を読んでももらえないかもしれないという懸念を、私に話してくれた。私も、これはありうる話だと思ったので、第一章の題の変更に同意し、結局ベトナム語版では「世界の中のベトナム」という、何を意味するのかわかりにくい題がつくことになった。

より内容的な問題としては、二つの問題がある。一つは、ベトナムにおける中国的なものを、私はベトナムの自主的選択と見るのに対して、ベトナムの研究者の間では、1000年以上にわたる中国のベトナム支配という、外的な強制の産物と見なす傾向が強いという問題である。東南アジアにおけるインドと中国の影響を対比し、前者の影響が平和的に拡大したのに対して、後者は軍事占領を通じてしか拡大しなかったということを強調したのは、フランス極東学院を代表する歴史学者のジョルジュ・セデス [セデス 1970] だが、この論点に関しては、現在のベトナムの学界にはまだセデスの影響が強いわけである。これに対して、日本のベトナム研究では、10世紀に中国からの自立を達成した直後のベトナムは、国家体制という点で見ると、中国的な中央集権国家というよりは、周辺の東南アジア諸国との類似性が高いことが強調される。ベトナムの国家体制の中国化は、むしろ時間の経過とともに強まっていくことになる。だとすれば、この中国化は、中国の支配の産物というよりは、ベトナムの自主的選択と見なすべきものになる。

いま一つは、前近代ベトナムの担った文明性の問題である。15世紀に明の支配からベトナムが独立を回復した時につくられた阮廌（グエン・チャイ）の「平吳大誥」は、南国意識を最も体系的に提示した文書として知られている。その中に、阮廌がベトナムを「文献之邦」つまりは「文明国」とであるとしている一節がある。これを私は、ベトナムが中国と共通の文明、すなわち中華文明を担っているという意味だと解釈するのに対して、ベトナムの研究者には、ここで阮廌がいつている文明とは、ベトナム独自の文明、ないしは「東南アジア文明」とでも呼ぶべきもので、中華文明のことではないとする見解をもつ人が多い。ベトナムの研究者がいうベトナム独自の文明、「東南アジア文明」とはどのようなものなのかは、論者によってかなり相違があるが、儒教・仏教・道教と土着的要素が混じった一種の混淆文明（「東南アジア文明」という概念を使う論者は、この混淆性を東南アジア性と見る）であり、ベトナム固有の「愛国主義」を核心としたものという理解が多い。

[Uy ban Khoa hoc Xa hoi 1980]。

このような形で前近代ベトナムの東南アジア性を強調すると、中華思想がベトナムの周辺との関係、つまりは東南アジア世界の中での定位を妨げていたという認識は出てこない。さすがに、現在のベトナムでは、前近代のベトナムと周辺との関係を、「中華」を代表して「野蛮」の世界（ないし「インド的世界」）に対峙してきたといった形で描いたり、あるいはベトナムの勢力拡張を当然の理があるものとして描く議論は、もはや存在しない。しかし、ベトナムと周辺の友好的ではない関係は、弱肉強食が当然とされていた前近代世界ではいたしかたがなかったものとして、扱われることが多い [Luu Van Loi 2000: 252]。

ナショナル・ヒストリーは、国民の歴史の内在的發展を重視する傾向をもっている。現在のベトナムでは、ベトナム史の内在的發展を促進した土着的要素を「東南アジア性」と見なすことが多くなっている。これは、一面では、チャンパーや扶南の歴史という、従来の国史からは排除されていたものを、ベトナム史に組み込む努力など、ベトナム史像にある種の「開放性」をもたらしてはいるが、非中国という意味での「東南アジア性」が強調されるあまり、「中華世界の中のベトナム」という側面が見えにくくなっていることは、否定できないのではなからうか。

また、これは私の議論も含めた問題だが、ベトナムを対象とすると、どうしても「中華世界」と「東南アジア世界」が、正反対の性格をもつ対立物のような論理構成になりがちである。「多様な中華」という議論が中国史で提起されると、ベトナム人ではない私までも、ベトナムがそんなものに包摂されてたまるか、などと思ってしまう面がある。しかし、そもそもは、「中華世界」と「東南アジア世界」を、世界地図の上に線を引くような、同一の次元で対立している世界と見なすことに無理があるのだろう [古田 1998: 51]。

III. 近現代史の諸問題

このような前近代史の問題に比べれば、ベトナムが東南アジア地域に自らを定位したのは、近代ナショナリズムの必然的結果だったという、近現代史に関する私の議論に対する批判は、あまり強くない。

例えば、私の議論では、伝統的な南国意識の制約の克服の第二課題、すなわち、カンボジア人やラオス人、その他の少数民族との提携という課題に関して、共産党の出現に先行して活躍したナショナリストは、十分な回答を出しえなかったことを強調している。私は、20世紀初頭の代表的ナショナリストであるファン・ボー・チャウが、「失われたベトナム」を、領域的にはカンボジア、ラオスを含めた「現存するインドシナ」と同一視する認識をもっていながら、カンボジア人、ラオス人やその他の少数民族を、ベトナム人と対等の同盟者とは見なさず、「蛮夷の経営」という枠組みでしかこれらの人々との提携を考えていなかった、という議論をしたことがある。この点は、ベトナムの研究者から厳しく批判されるのではないかと考えていたが、ベトナムのファン・ボー・チャウ研究の第一人者であ

るチュオン・タウ (Chuong Thau) 教授は、これはベトナムでの研究が十分注目していなかった側面であると、たいへん私に好意的な論評をしてくれた。

ただし、当然のことながら、いくつかの問題がある。まず第一は、私の議論が、基本的にはナショナリズムを近代史の産物と考えているのに対して、ベトナムでは、「愛国主義の4000年の伝統」という表現に見られるように、伝統と近代の連続性を強調する傾向が強いことに派生する問題である。特に、社会主義陣営の崩壊以降、社会主義というシンボルのベトナム化が進み、「民族的伝統」との結合が強調されるようになっている現在のベトナムでは、共産主義運動に関しても、その反伝統主義的側面よりは、伝統との結合の側面が高く評価される傾向にある。

こうなると、例えば、ベトナム人共産主義者が1930年から51年まで、自らの党をインドシナ共産党として組織していたことへの評価に、問題が出てくる。ホー・チ・ミンが1930年2月にベトナム共産党として組織した党は、モスクワで訓練を受け、当時のコミンテルンの路線に忠実だったホーよりも若いベトナム人共産主義者によって、インドシナ共産党と改称された。若いベトナム人共産主義者の論理は、国際主義者たる共産主義者が、ベトナム革命のことばかり考え、同じ植民地支配のもとにあるカンボジアやラオスのことを考えないのは、国家主義的偏向だ、というものだった。私の議論では、この発想は、コミンテルン版国際主義の教条的な引き写しではあったが、ベトナムを東南アジアに定位するという面では重要な役割を果たした、と位置づけられている。

ベトナムが、自らを人類普遍の真理としての社会主義を体現した普遍国家と見なし、またカンボジア問題で「インドシナ三国の戦闘的連帯」を強調していた時期には、ベトナム国内でも、共産党がインドシナ共産党として組織されていたことは高く評価されていた。現在でも、インドシナ共産党を組織したのは誤りだったというような、政権政党である共産党の歴史の一部を否定するような議論は、ベトナム国内ではまだ出現していないが、1990年代以降は明らかに、共産党がかつてインドシナ共産党として存在していたことをあまり強調しないという方法で、どう見ても反伝統主義的行動だったインドシナ共産党への改称の意義を否定的に評価し、むしろベトナム人の共産党にはベトナム共産党という名称がふさわしいとした、ホー・チ・ミンの立場を高く評価する傾向にある^{*1}。

この点で、インドシナ共産党という発想は、インドシナ半島に覇権を唱えようとしたベトナム人の大国主義のあらわれで、その点では伝統的発想だったのではないか、ベトナム人も1990年代初頭までのカンボジア問題でこうした発想に懲りて、それへの反省からインドシナ共産党の評価が下がっているのではないか、という見方もありえよう。しかし、ベトナムでの議論に即しているならば、最近のインドシナ共産党への低い評価は、上述のような角度からなされているのであって、大国主義への反省という契機はあまり作用してい

* 1 ベトナムの最新の大学歴史教科書の節の見出しには、ベトナム共産党は出現するが、インドシナ共産党は出てこない [Nguyen Quang Ngoc 2000]。

ないと思われる。

私は、「インドシナ革命」という発想にこだわり、「ベトナム革命」という言葉を使うことすら排斥した、1930年代の共産主義者の国際主義があつてはじめて、「ベトナム」というシンボルの相対化、具体的にはそれを狭い意味のベトナム人（キン族）の独占物とは考えずに、ベトナムに住む他の少数民族とも共有すべきものという発想が生まれたのだと考えている。こうした30年代の国際主義への積極的評価は、ベトナムの学界の現在の主流的発想とは相違していることは疑いない。

第二の大きな問題は、いま述べたこととはある意味で矛盾するのだが、「普遍国家」から「地域国家」へという私の議論は、私なりのベトナム史の基本的な趨勢の総括であつて、現在のベトナム自身がこれでわりきれているわけではないという問題である。ベトナム共産党は、1991年に、党の思想的基盤として、従来の「マルクス・レーニン主義」に「ホー・チ・ミン思想」を加えることを決定した。この「ホー・チ・ミン思想」が加わったという点を強調すれば、人類普遍の社会主義からベトナム的社会主義への転換、つまりは「普遍国家」から「地域国家」へという私の議論の根拠になるのだが、ベトナムが依然として「マルクス・レーニン主義」を放棄していないということも、もう一面の事実である。「普遍国家」から「地域国家」へといつても、社会主義という理念の人類普遍的な妥当性をいまのベトナムが否定したわけではない。

私の議論では、第二次世界大戦後のベトナム史で、ベトナムが「ベトナムらしかった」のは、1940年代の後半と、80年代後半のドイモイ開始以後ということになる。この歴史像は、冷戦期の社会主義体制下で暮らした経験をもつベトナム北部の庶民の歴史感覚とは大きくずれてはいないと思うのだが、常識的なベトナム史像とはかなり異なっている。いうまでもなく、世界史的に見れば、第二次世界大戦後のベトナムの最も「輝かしい」歴史は、フランスとアメリカを相手にしての戦争、つまりは第一次インドシナ戦争とベトナム戦争、ベトナム史に即していえば抗仏戦争と抗米戦争であろう。現在のベトナムで展開されているドイモイが、ベトナム戦争の「栄光」からの脱出という側面をもっていることは事実だが、ベトナム戦争そのものは現在の統一ベトナムを生み出した戦いであり、ベトナムにとっては依然、国家の正統性の源泉という重みをもっている。現在のベトナムでは、抗仏戦争と抗米戦争を肯定的に評価するという大枠での一致はあるものの、この時代の評価は、論者の関心によって様々である [古田 1991]。しかし、いずれにしても私のような議論は、かなりの違和感をもって受け止められている。

また、私の議論では、ベトナム民主共和国が生まれたばかりの1940年代後半は、冷戦構造にベトナムがまだ包摂されておらず、その分ベトナムの個性が発揮された時代ということになるが、ベトナムの学界では、依然この時代を、ベトナムが国際共産主義運動から地理的に孤立していたがゆえの、「特殊な段階」ととらえる見解が強い。半世紀以上が経過した第二次世界大戦後の歴史の中で、ベトナムが冷戦構造に拘束されていた時期を、1950年初頭から86年末のドイモイ提唱までの36年間であつたとすると、そうでなかった時期は

まだ20年しかない。この状況では、36年間のほうが典型的に見えるのは、やむをえないことであろう。

しかし問題は、こうしたレベルにとどまらない。問題は、ベトナムが東南アジアに自らを定位していく歴史、および東南アジアの地域的一体性の形成の歴史にとって、冷戦期、特にベトナム戦争がどのような意味をもったのかを解明する上での、私の議論そのものの弱点とも関連しているように思われる。私は、冷戦という国際構造のもとで、フランスやアメリカという強大な敵を相手に戦わざるをえなかったベトナムにとっては、自らを「社会主義陣営の東南アジアにおける前哨」という、冷戦期の「普遍国家」として位置づける以外の選択肢はありえなかった、しかし、ベトナム戦争でのベトナムの抵抗は、ベトナムのような小国の個性の発揮を抑圧する構造をもっていた冷戦構造そのものへの抵抗という性格を有しており、そこでのベトナムの勝利は、大局的にはベトナムの個性の発揮＝東南アジアへの定位、および東南アジアの地域的一体性の形成に貢献した、という議論を展開している。

しかし、これだけでは不十分で、ベトナム戦争が東南アジアにとってもった意味が、より実態的に解明されないと、私の議論の説得性にも限界があるだろう。私は、オーストラリアに関しては、初歩的ではあるがベトナム戦争のインパクトを検討したことがある。ここでは、ベトナム戦争を経て、オーストラリアの防衛政策が、専守防衛型の「大陸防衛政策」へと転換し、それまでのイギリスやアメリカへの過度の依存から、周辺のアジア諸国との関係重視へと向かわせたという点と、オーストラリアがベトナム戦争へ参戦したことへの贖罪感もあって促進されたインドシナ難民の受け入れが、「白豪主義」から「マルティカルチュラル・オーストラリア」への転換を最終的に決定づけたという点で、「アジア太平洋国家」としてのオーストラリアの誕生にベトナム戦争が大きな意味をもったことを指摘した〔古田 1996: 39-42〕。このオーストラリアの転換も、同国がカンボジア問題の解決に積極的に参与し、東南アジアの地域的一体性の形成に貢献する要因になっているといっていよう。

こうした分析が、ベトナム以外の東南アジア諸国に関しても必要である。冷戦時代の東南アジア史には、ベトナム戦争と ASEAN 諸国の経済発展という二つの顕著な事象が見られた。冷戦体制崩壊後の東南アジアにおける地域的一体性の急速な発展を理解するためには、この二つの事象のうち、どちらが重要だったのかということではなく、その相互の関係を解明することが不可欠であろう。現在、韓国や台湾に関しては、その経済発展とベトナム戦争との関連を軸に、ベトナム戦争がそれぞれの歴史にもった意味を解明しようとする業績が生まれている〔朴 1993, 木宮 1996〕が、東南アジア諸国に関してもこうした研究が待望される。

結びにかえて

ベトナムに即して見れば、東南アジアという地域性は、20世紀のベトナム史が「発見」

した「つくられた地域」である。「中華世界の中のベトナム」が1000年近く続いたのに対して、「東南アジアの中のベトナム」がどの程度の持続性をもちうるのかは、21世紀の歴史にかかる問題である。私の俯瞰図は、1995年のベトナムの ASEAN 加盟が「終点」に位置するようにベトナム史を描くとすれば、このようになるという話であって、「終点」の位置をずらした場合にどれほど有効なのかは、東南アジアがベトナムのアイデンティティの安定した枠組みになるかどうかにかかっている。

「地域国家」として、その個性を発揮することが積極的に評価されるようになっている現在のベトナムでは、「伝統の尊重」とか「伝統の発揮」は、プラスの価値として強調されている。ところが、「伝統の尊重」といった途端に出てくる問題がある。それは、現在のベトナムでは、中国語や日本語を勉強した人を除くと、漢字の知識がまったくなくなっている、という問題である。ベトナム語のローマ字表記法=クォックグーは、識字人口の増大には大きく貢献したし、今後いかに中国が強大化しようとも、ベトナムが飲み込まれることはない歯止めの一つになっているわけだが、伝統との断絶という面を生んでいることは疑いがない。そのため、「伝統の尊重」というようなことをいうからには、日本の教育漢字程度の限定された範囲でよいから、初等・中等教育に漢字教育を復活させるべきだ、という議論が出されるようになっている。

漢字教育復活論は、ベトナムの中華世界への回帰を単純に意味するわけではないが、「東南アジアの地域国家」という自己定位が「伝統の尊重」を生み、それが漢字再評価に結びつくということは、現在のベトナムにとっての東南アジア性や東アジア性という地域性が、きわめて流動的な性格を帯びたものであることを示しているといつてよいかもしれない。

参考文献

朴根好

1993 『韓国の経済発展とベトナム戦争』 御茶の水書房。

古田元夫

1991 「ベトナムにとってのベトナム戦争」 東南アジア史学会『東南アジア——歴史と文化』 20 山川出版社, pp.118-132。

1995 『ベトナムの世界史』 東京大学出版会。

1996 「ヴェトナム戦争」 歴史学研究会編『講座世界史10 第三世界の挑戦』 東京大学出版会。

1998 「地域区分論——つくられる地域、こわされる地域」『岩波講座 世界歴史』第1巻 岩波書店。

Furuta, Motoo

1998 *Viet Nam trong Lich Su The Gioi*, Nha xuất bản Chinh tri Quoc gia.

2000 “Viet Nam trong Khu vuc Dong Nam A The ky 20,” National Center for Social Sciences and Humanities, Vietnam National University Hanoi, *International Conference Vietnam in The 20th Century*, Nha xuất bản The gioi.

木宮正史

1996 「ベトナム戦争とベトナム特需」 服部民夫・佐藤幸人編『韓国・台湾の発展メカニズム』 アジア経済研究所。

Luu Van Loi

2000 *Ngoai Giao Dai Viet*, Nha xuất bản Công an Nhân dân.

桃木至朗

1996 『歴史世界としての東南アジア』 山川出版社。

Nguyen Quang Ngoc (chủ biên)

2000 *Tiến Trình Lịch Sử Việt Nam*, Nha xuất bản Giáo dục.

セデス, ジョルジュ (辛島昇・内田晶子・桜井由躬雄訳)

1970 『インドシナ文明史』 みすず書房。

Ủy ban Khoa học Xã hội

1980 *Nguyen Trại*, Nha xuất bản Khoa học Xã hội thành phố Hồ Chí Minh.